

新東京国際空港No.12遺跡
の有舌尖頭器をめぐって

鈴木 道之助

目 次

はじめに	3
1 No.12遺跡の概要	3
(1) 隆起線文土器	3
(2) 石 器	5
2 No.12遺跡の有舌尖頭器	9
(1) 有舌尖頭器の研究略史	9
(2) No.12遺跡の有舌尖頭器とその位置	10
(3) 有舌尖頭器の変遷	16
3 小 結	17

はじめに

成田市と芝山町、多古町にまたがる新東京国際空港地内には、先土器時代から近世の牧に至るまで多くの遺跡が所在するが、先土器時代から縄文時代の初頭の遺跡に特色がある。県下でも最も古い先土器時代の遺跡の一つであるNo.55遺跡、多数の石斧を出土したNo.60遺跡、撚糸文土器最終末の細沈線を多用した木の根式土器で注目されたNo.6遺跡などが代表的であるが、本稿では、縄文時代草創期のNo.12遺跡から出土した有舌尖頭器を中心に、その概要を紹介するとともに派生する問題について触れたい。

1 No.12遺跡の概要

新東京国際空港一帯は、印旛沼、利根川水系と太平洋に注ぐ栗山川、木戸川などの太平洋水系との分水嶺をなす地域で、谷津の開析率は概して小さく、広大な台地を形成している。No.12遺跡は、栗山川の支谷である高谷川の水源である小支谷に囲まれた標高約40mの舌状台地上に位置する。新東京国際空港の北端部に当たり、昭和59年4月1日から同年10月6日に（財）千葉県文化財センターによって発掘調査が実施された。現在のところ、部分的な整理のみにとどまっており、本格的な整理作業は昭和62年度以降に実施される予定である。

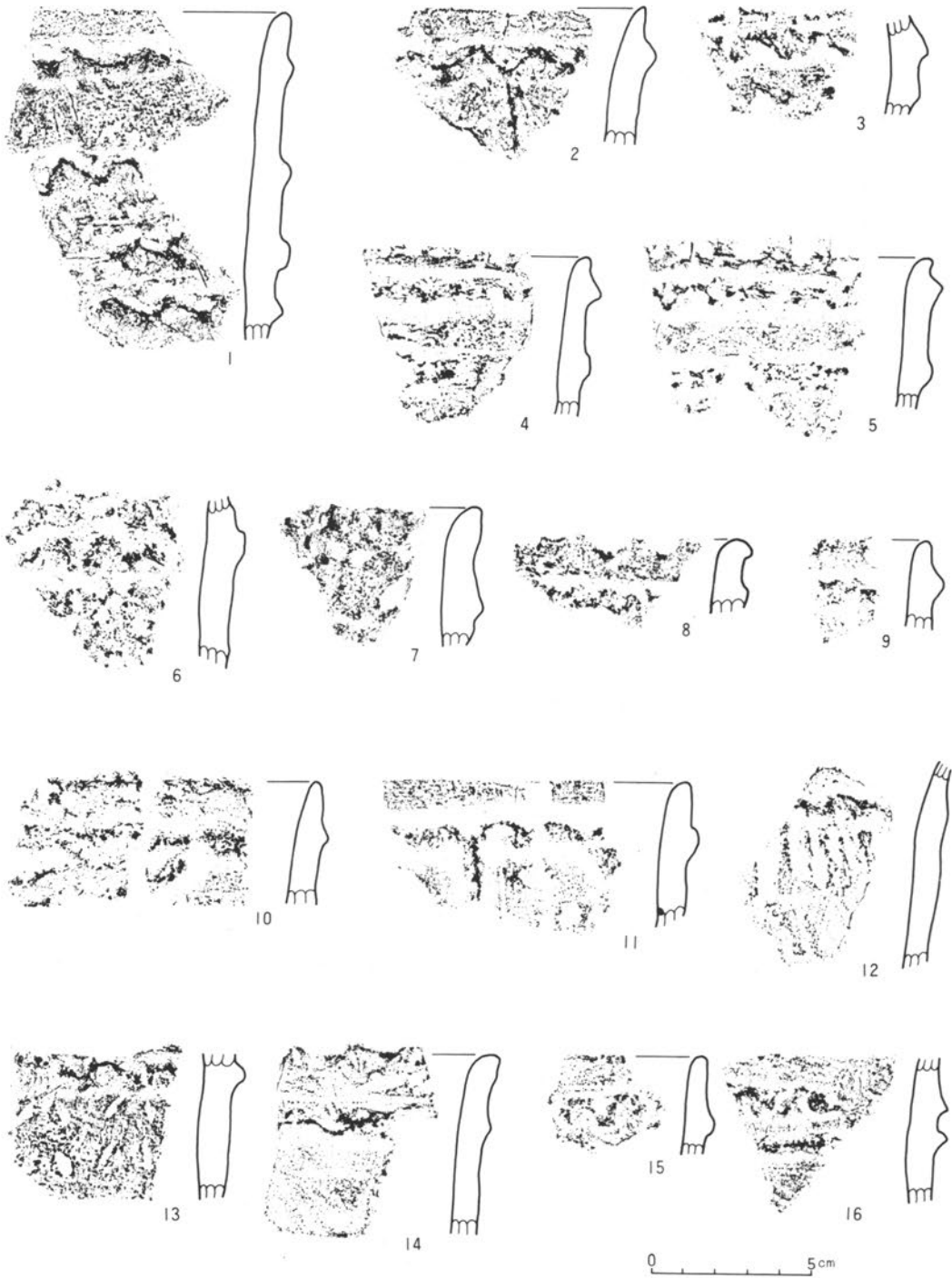
同遺跡からは、先土器時代のナイフ形石器を主体とするブロックが9か所の他、縄文時代草創期（隆起線文土器）、早期（撚糸文土器主体）、前期（黒浜式土器、浮島式土器）などが検出されたが、特に注目されたのは、隆起線文土器とそれに伴う有舌尖頭器を中心とする石器群の出土である。これらの遺物は径約20mの範囲に集中して出土しており、縄文時代初頭の一括遺物として極めて良好な資料である。有舌尖頭器の数量は実に44点に及び、長野県柳又遺跡（樋口他1965、小林1967）、愛媛県上黒岩岩陰遺跡（江坂他1967、1969）をしのいでいる。以下、時代的な背景を知るために主要な遺物の概要について述べる。

(1) 隆起線文土器（第1図）

胴部小破片を含め約100点の出土をみた。口縁部破片でみる限り、11個体以上であると推定されるが、破片のみで全体の器形が知れるものはない。器厚は概ね6～8mmのものが大半であるが、若干薄手のものもある。色調は明るい褐色を呈するものが多い。4、5などはやや赤味を帯びている。胎土の含有物はまだ分析が済んでいないので詳述は控えるが、長石などの挟雑物が目立つ。

文様構成及び文様要素から以下のように分類できる。

A類 幅5～7mmの隆起線を口縁に平行して多条に貼付したもの(1)。隆起線は上下から交



第1図 新東京国際空港No.12遺跡出土の隆起線文土器

互に押し潰され、ミミズ腫れ状となる。口縁直下に1条、やゝ間隔を置いてさらに3条の隆起線を配している。

B類 文様帯は口縁部に集約されているようであるが、二本の平行隆起線間を垂下(2、11、12)あるいは斜行(10)する隆起線が区画し、幾何学的な文様を構成するもの。隆起線は押し潰しのあるものと断面三角形の隆起線をもつもの(2、11)の二種類がある。隆起帯の押し潰しは、指頭で上下から挟んでひねったもののように、指頭痕らしきものが残存するものもみられる。

C類 口縁に平行する1ないし2条の隆起線で構成される。口唇部の上端を指頭(8、14)や棒状工具(4、5)で外側に押し潰し、隆起線の波状と同様の効果を作出したものもある。隆起線には波状を呈するもののみでなく断面三角形の細めの隆起線を付加しているもの(16)もある。

D類 波状を呈する隆起線に「ハ」の字形の爪形文を付加するもの。13は、隆起線に2条の爪形文が平行して施されている。爪形文は親指と人指し指でつまんだものと思われ、内側に盛り上がりがある。

(2) 石 器

① 有舌尖頭器(第2図)

本遺跡の最も特徴的な石器である。

44点の出土をみた。有舌尖頭器については次章で触れるのでここでは省略する。

② 尖頭器(第3図)

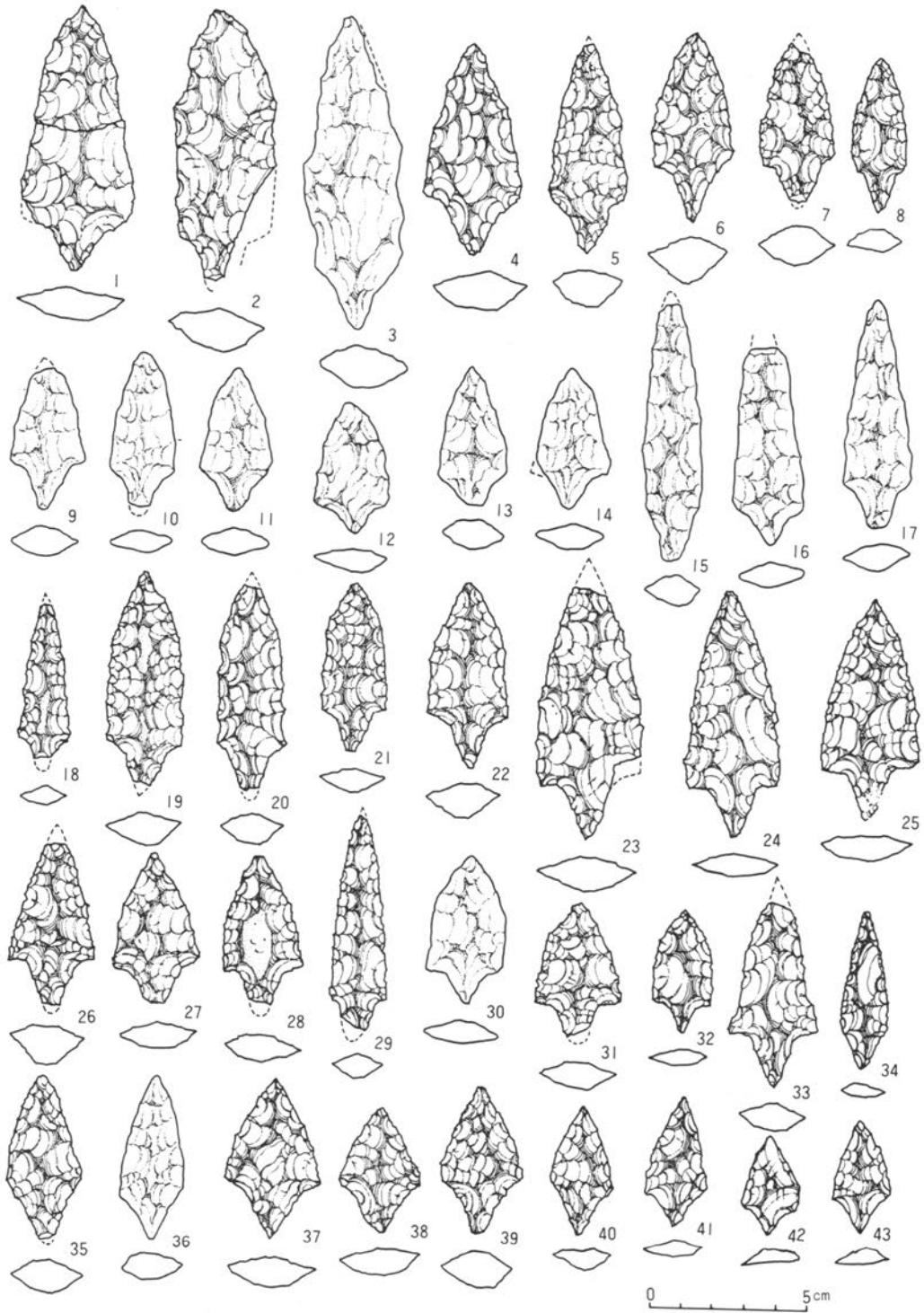
未成品も含め30余点の出土をみた。石材は安山岩、砂岩、チャート、珪質粘板岩であるが、大半が安山岩である。完成品の形態は比較的単純な組成で、両端がほぼ対称的に尖る柳葉形のもの、最大幅が基部近くにあり、基部がやゝ丸味を帯びたものに2分される。未成品がかなりの数で存在するが、円礫から横長の剝片を剝取り、周辺から加撃して概略の形を作り、さらに周辺部を調整して形状を整えている。3は側面に打面を残し、主剝離面側が未調整である。未成品の中には有舌尖頭器の未成品となるものも多いと思われる。

③ 打製石斧

4点出土している。いずれも細粒砂岩を原材としている。片刃石斧であるが、製作は粗雑である。断面三角形で丸のみ状の刃部をもつものもある。

④ ドリル

剝片の一部を両側から有舌尖頭器の舌部製作の技法そのまゝに鋭く尖らしたものの2点ある。いずれも安山岩製である。



第2図 新東京国際空港No.12遺跡出土の有舌尖頭器

⑤ 搔器

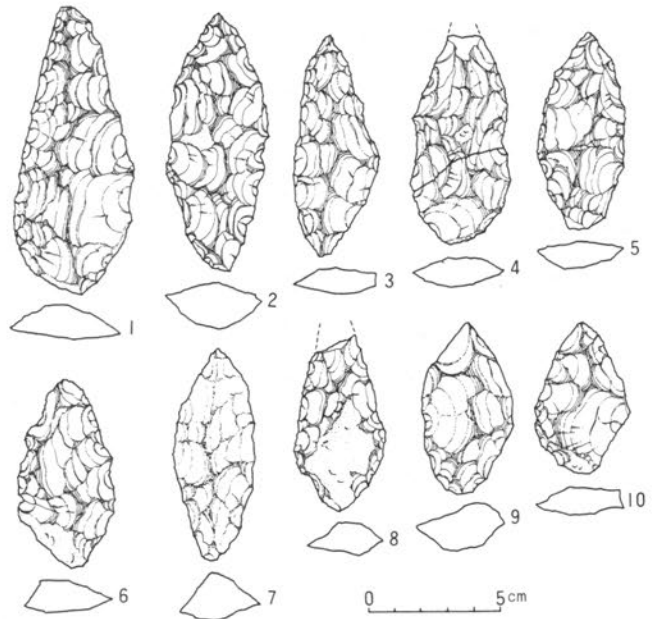
横長の剥片の一部に調整を加えたもの。いわゆる搔器状の肉厚な急斜な調整をもつものとは異なる。

⑥ 有溝砥石

器面が著しく荒れているが、中央部に幅約5mmの溝がある。溝底面も凹凸が激しい。

⑦ 石鏃

隆起線文土器の出土地点から4点の出土をみたが、鋏形鏃もあり、該期のものは断定できない。



第3図 新東京国際空港No.12遺跡出土の尖頭器

さて、隆起線文土器を出土したNo.12遺跡は、隆起線文土器のいかなる段階に当たるものであろうか。隆起線文土器は、これまで、小林達雄（小林1963）、佐藤達夫（佐藤1971）、白石浩之（白石1976）、大塚達朗（大塚1972）氏らによって編年が試みられている。小林氏は隆起線文土器が次第に細くなる傾向をV段階に細分し、大塚氏は「ハ」の字形の爪形文が微隆起線文土器だけでなく隆起線文土器にも付される点を注目し、これまで新しい要素と言われてきた「ハ」の字形爪形文が最も古い段階から存在することを明らかにするとともに、文様帯の構成を重視してIV期の編年試案を示した。本稿は隆起線文土器そのものの細別を目的としているわけではないので詳述は控えるが、最近の出土例である神奈川県花見山遺跡（阪本1977）、千葉県南原遺跡（大塚他1980）の資料の分析から、隆起線文土器、特に「ハ」の字形爪形文の上限について留意されたのは重要である。小破片から判断せざるを得ない該期土器群の編年に当たっては、従来、「ハ」の字形爪形文がより新しいと判断される指標的なものと考えられがちであったが、隆起線文土器の波状隆起線が指頭によるひねりであるものが多いことを考慮すれば、隆起線文土器の初期の段階から存在していたとしても何ら不思議はない。南原遺跡また本遺跡例はそれを裏付けるものであろう。

関東地方において、隆起線文土器の最も新しい段階は、神奈川県栗木（増田他1978）、埼玉県小岩井渡場（安岡1977）、栃木県大谷寺洞穴の一部（埴1976）などであろう。極めて細い微隆起

線が連続的あるいは帯状に何本も横走している。そして最も古い段階は、花見山の一部、南原、東京都多摩ニュータウンNo426（原川他1981）、神奈川県黒川東遺跡（村田他1980）であろう。隆起線は太く、また指頭や工具による隆起線の押し潰しやひねりによって波状を呈している。長崎県福井洞穴（芹沢1970）や、愛媛県上黒岩岩陰遺跡とも関連するような、幾何学的文様が多用されているのも特徴的である。中間的な位置に神奈川県なすな原遺跡（岡島1977）の一部、千葉県瀬戸遠蓮遺跡（鈴木1974）などがこよう。波状隆起線と細い隆起線が組み合った土器である。前段階でみられた幾何学的文様は残存するが、細い隆起線によるようになる。長野県石小屋洞穴例（永峯1967）との関連の深い土器群であるが、従来の隆起線文、微隆起線文土器という区分では細別が困難となるものも多い。細別の根拠等については殆んど触れなかったが、いずれ別稿で述べる予定である。

No12遺跡は、多条に貼付した波状隆起線、口縁部の幾何学的な波状隆起線から花見山、南原遺跡に最も近似した特徴をもつ土器を出土しており、現段階においては関東地方で最も古相を示すものとも言える。しかしながら、福井洞穴、上黒岩岩陰遺跡と同一視できるかは、若干疑問の余地も残る。福井洞穴の隆起線文土器は、刻目あるいは刺突を施した幅広の隆起線文を口縁に平行して貼付け、隆起線間に細めの隆起線が垂下、斜行するいわゆる隆帯文土器と、ほぼこれと同様な文様構成をとりながらやゝ細めの隆起線による隆起線文土器の二種よりなる。上黒岩岩陰遺跡は、指頭によると思われるミミズ腫れ状の波状隆起線が口縁部に平行に施され、これを分断するかのよう口縁から垂下する2条の波状隆起線によって幾何学的な文様帯を形成している。斜行する隆起線文をもつものもあり、福井洞穴が刻目、刺突をもつ隆起線を多用していることに若干の相違はみられるが、両者は極めて近似する関係にある。隆起線の幅の変化は、装飾方法の差によるようであり、福井洞穴の隆帯文土器も隆帯間を結ぶ隆起線は細めである。

No12遺跡の隆起線文土器は、口縁に平行する2条の隆起線間をやはり、垂下あるいは斜行する隆起線で幾何学的な文様構成をとっており、福井洞穴、上黒岩岩陰遺跡との間に強い関係が看取できる。しかしながら両遺跡の垂下あるいは斜行する隆起線貼付部が、口縁部のみでなく、胴部にも及ぶ例が多いことは長崎県泉福寺洞穴（麻生他1985）にもみられ、豆粒文状の楕円形浮文の存在（福井洞穴）など両者は必ずしも一致しない。土器量そのものが少ないので速断はできないが、No12遺跡をはじめ、花見山、南原遺跡は文様帯が口縁部に集中される傾向がみられることから、福井洞穴、上黒岩岩陰遺跡よりもやゝ後出的な様相を示しているようである。しかし、地域差も考慮せねばならず、両者の関係は、今後中間地域における状況が明らかになった段階で結論づけるのが至当であろう。

2 No.12遺跡の有舌尖頭器

(1) 有舌尖頭器の研究略史

有舌尖頭器が初めて注意され出したのは、1958年の北海道立川遺跡の調査以後である。芹沢長介氏は、新潟県中林遺跡出土の有舌尖頭器を考察するなかで、旧石器時代から新石器時代への過渡期的な特徴を示す石器として注目し、全国的な編年を発表した。氏の編年基準は舌部の発達程度にあり、舌部未分離の第1群から小型化する第IV群まで細分したものであるが、大筋の流れとしては、資料の増加した現在でも有効性を保っている基本的な編年案であった（芹沢1967）。芹沢氏の発表の翌年、小林達雄氏は長野県柳又遺跡出土の有舌尖頭器が、形態的にも、統計的な大きさ等についても、また技術的にも一つの斉一性があることに着目し、愛媛県上黒岩岩陰遺跡や小瀬ヶ沢洞穴遺跡との対比を試み範型論を展開したことはよく知られている（小林1967）。

その後、地域的あるいは全国的な視野で大井晴男（大井1970）、加藤稔（加藤1978、1986）、白石浩之（白石1976）氏らによって研究が進められ、最近では増田一裕（増田1981）、栗島義明（栗島1984）、森嶋稔（森嶋1986）氏らによって編年が試みられている。増田氏は舌部の形態と大きさを中心に、栗島氏は形態を中心に18の型式に細別し、立川系、小瀬ヶ沢系、柳又系に3分し、その型式の組み合わせと編年について述べている。森嶋氏は、神子柴系文化、隆起線文土器との関連等からVI期の区分をしている。筆者も縄文時代初頭の狩猟活動を分析するなかで、有舌尖頭器の用途について考察し、先土器時代からの伝統を残す尖頭器、そして縄文時代の新しい狩猟具である弓矢（石鏃）との関係からその消長について触れたことがある（鈴木1976、1981）。

有舌尖頭器の型式分類及びその編年は、実のところ困難な面が多い。その理由の第1は石器特に実用利器一般に共有される特徴であるが、形態等に現れる変化が比較的乏しいこと、第2に大方の編年基盤が土器型式との対比に求めているものの、隆起線文土器の型式決定また変遷過程が必ずしも明らかになっているわけではないこと、第3に資料そのものが乏しく、各遺跡から出土した有舌尖頭器も組成の一端を示しているだけで、全容を知れるものではないことなどがあげられよう。また、資料的に不十分な段階で、土器型式よりも細分するような型式設定が果して必要かとも反省される。

(2) No.12遺跡の有舌尖頭器とその位置

No.12遺跡の有舌尖頭器に触れる前に、有舌尖頭器の形態分類をしておく必要がある。形態分類と型式分類とは本来全く異なるものであり、型式分類には、形態、組成、技術等総合的な検討が必要であるが、先土器時代の石器と異なり、有舌尖頭器の技術的な対比は困難な面が多い。平坦剥離が一般的となった段階では、いかなる剥片からでも成品を作り出すことが可能であり、適正な素材の作成等に定型的な過程（石刃技法等）を踏む必要性は乏しくなったと考えられる。特に完成品においては最終的な調整段階のものを除くと技術的な対比は困難であり、形態的な類似を頼りにせざるを得ない面が多い。

有舌尖頭器を形態分類するに当たって最も重要な点は基部の形状にある。有舌尖頭器の分類に参考となるのは、縄文時代の最もポピュラーな石器である石鏃のうち有茎石鏃がある。有茎石鏃の分類は、赤堀英三氏（赤堀1929）、佐原真氏（小林・佐原1964）によってなされているが、赤堀氏による分類は、基部の形状にあり、最も有効である。しかし、呼称方法が面倒であるの

で、呼び方は佐原氏の方法に準拠することとした。大小及び舌部の幅の差こそあれ、有舌尖頭器と有茎石鏃とは共通する特徴が多い。これに属性の一つとして側縁の形状を加味した分類を第4図に示した。増田氏の分類は、平基群と凸基群を一括したものであるが、基本的には赤堀氏による分類に近い。なお、柳又型と小瀬ヶ沢型と呼ばれる本州、四国の二系統の有舌尖頭器の最も大きな相異の一つは舌部の長さの極端な差である。標式遺跡の柳又遺跡は平均5mm、最大でも8mmにすぎない。上黒岩岩陰遺跡は柳又遺跡よりさらに舌部が短い。一方、小瀬ヶ沢洞穴は点数は少ないものの平均9mm、本遺跡は12mm、南原遺跡

	外彎側縁	直線側縁	内彎側縁	平行側縁
尖基式群				
凸基式群				
平基式群				
凹基式群				

第4図 有舌尖頭器の形態分類模式図

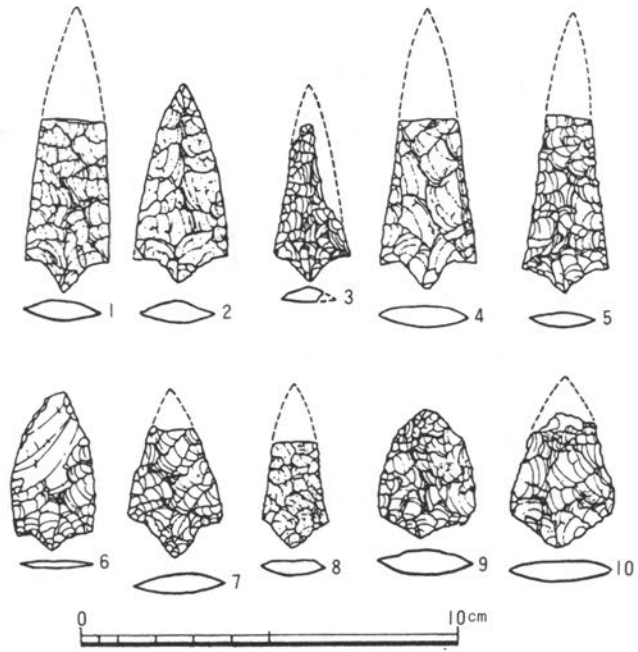
は9mmとその差は歴然としている。もともと小瀬ヶ沢洞穴の有舌尖頭器は、増田氏が躊躇したように攪乱状態の出土であり、また類例も少ないことから小瀬ヶ沢型の一側面を示しているだけのようで型式（むしろ系列か）設定は他の遺跡を標式とした方が良さそうでもある。

さて、No.12遺跡の有舌尖頭器44点のうち、基部が欠損するもの及び未成品の2点を除いた42点の内訳は、尖基式群9点、凸基式群22点、平基式群11点である。石材は、安山岩、砂岩が最も多く、チャートを混ぜる。黒曜石製はない。

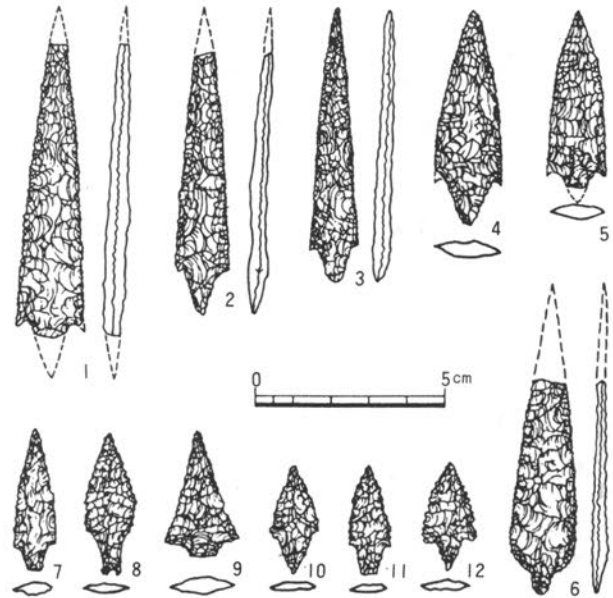
① 尖基式群(第2図34~43)

基端部からやや内彎気味の舌部が直接続くものであるが、柳又型に独特な微尖基状の舌部とは異なり、むしろ凸基式群の基部と舌部が不明瞭なものとしてみた方が良いであろう。身部側縁は緩かに外彎する。身部長2.0~2.5cmの小型のものが多いが舌部の大きさは他の群のものと変わらない。全体的に幅広で寸ずまりの感があるが細身のもの(34)もある。

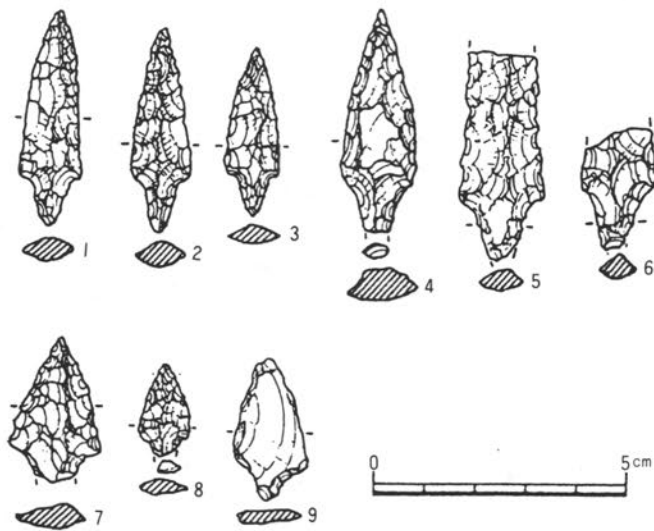
② 凸基式群(1~22) 突出する基部に舌部が付くもので身部側縁が緩かに外彎するもの(1、



第5図 柳又遺跡の有舌尖頭器



第6図 小瀬ヶ沢洞穴の有舌尖頭器



第7図 南原遺跡の有舌尖頭器

頭器状の周辺から粗い調整を施したのみの身部で厚みがまだ残りゴロゴロした感じであるが、背面(主剥離面側)から舌部の部分を加撃して作り出している。失敗作のようで反対側は大きく欠損している。石器の接合等技術的な検討はまだ済んでいないが、円礫の表皮を取る程度に調整した後、側面にフラットな打面を作り、加撃して横長のやゝ厚めの剥片を剥離し、表面側をまず打調した後、主剥離面側を加工し、打面はその後除去するようである。7は並列した剥離が表裏にみられる。18、20は側縁が鋸歯状を呈する。21、22は側縁が直線的に変化し、将棋駒状の外形となる。

③ 平基式群 (23~33)

基部が長軸とほぼ直行するもの。これも外彎側縁(23~28)、直線側縁(29)、平行側縁(30~32)があるが、33のように基端部が張り出したようになる側縁下半が内彎するものもある。29は小瀬ヶ沢型の典型例に近いが基端部が返しとなるほどは発達していない。側縁は鋸歯状を呈する。

以上、No.12遺跡の有舌尖頭器について触れてきたが、できるだけ近隣の地域で他の遺跡との比較を試みてみよう。

(成井遺跡)

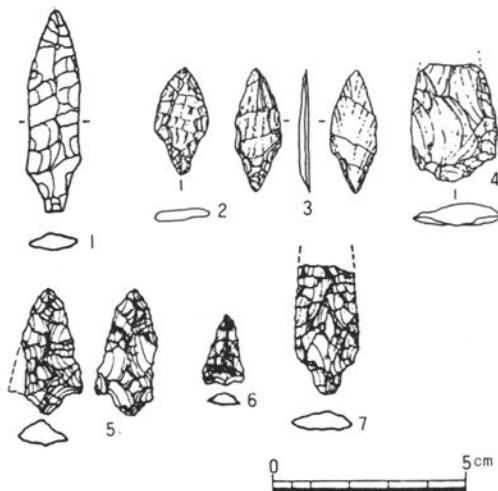
本遺跡例と最も近似する状況を示しているのは、千葉県成井遺跡(篠原1981)である。同遺跡は略報のみであるが、(財)千葉県文化財センター発行の「房総考古学ライブラリー1 先土器時代」に16点の有舌尖頭器が収録されている。内訳は凸基式群8点、平基式群8点であり、尖基式群及び凹基式群は欠けているようである。身部側縁は、直線的なもの2点(いずれも凸基

4~15)、直線的なもの(16~18)、基部寄りの身部両側縁が平行的で、先端近くで急にすぼまり、五角形に近い形状となるもの(19~22)に3分される。大きさにもかなりバラエティーがあり、最小のものが全長25mm、最大のものは69mmである。舌部は逆三角形状をなすが、先端がやゝ太目で丸味を帯びるもの(7)もある。2は未成品で、尖

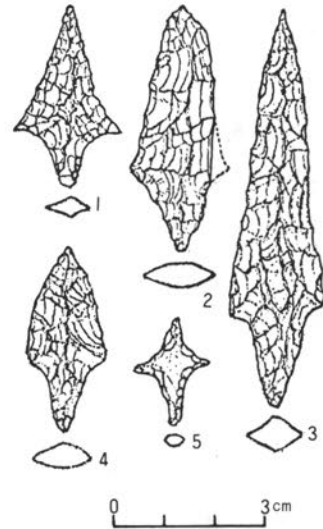
式群)、平行的なもの3点(凸基式群1、平基式群2)がある。図示された凸基及び平基式群でみる限りNa12遺跡と比較すると①平基式群の比率が高い。②凸基式群も基部と舌部が明瞭になるものが多い。③側縁が明らかに内彎するものがない。④平基式群に小型のものが多いという差異がみられるものの全体的には類似する傾向が強い。尖基式群が欠けているのは、Na12遺跡に比し、基部と舌部の角度が成井遺跡の方が大きいということに関係しよう。平基式群の比率が高いことも無関係ではなかろう。成井遺跡は波状隆起線をもつ隆起線土器が伴っているが、口唇部に刻目のみをもつ無文土器、小波状縁で器面に帯状の「ハ」の字形爪形文をもつ爪形土器が伴い、Na12遺跡より一段階新しい様相を示しており、千葉県遠蓮遺跡(鈴木1974)と類似する土器群である。瀬戸遠蓮遺跡は、かつて、「ハ」の字形爪形文、比較的細目の隆起線の存在をもって、長野県石小屋洞穴(永峰1967)の微隆起線土器に対比したことがあるが、その後、神奈川県花見山、千葉県南原遺跡で「ハ」の字形爪形文が明らかに隆起線土器の段階まで遡ることが確認された。大塚氏が言及されたように瀬戸遠蓮遺跡は隆起線土器の段階にまで遡るものであろう。

(南原遺跡)

千葉県南原遺跡は、口縁に平行する波状隆起線や鋸歯状あるいは三角形の構成をもつと推



第9図 黒川東(1)、多摩ニュータウンNa426(2~4)前原(5~7)遺跡出土の有舌尖頭器



第8図 花見山遺跡の有舌尖頭器

定される隆起線土器が出土した。関東地方では古式の隆起線土器であり、Na12遺跡出土の隆起線土器と酷似する。有舌尖頭器は18点出土しており、基部の形状がわかるものも11点ある。全て凸基式群よりなる。舌部の形状は逆三角形となるが、基部と舌部の分離がやゝ不明瞭なものも存在する。身部の作りに特徴があり、両側縁が平行というよりもわずかに内彎するものも存在する。全長の知れるものは少ないが4.0~4.5cmが平均的である。この他、おそらく6cmを超えると推定されるやゝ大型のもの、2cm台の小型品もある。Na12

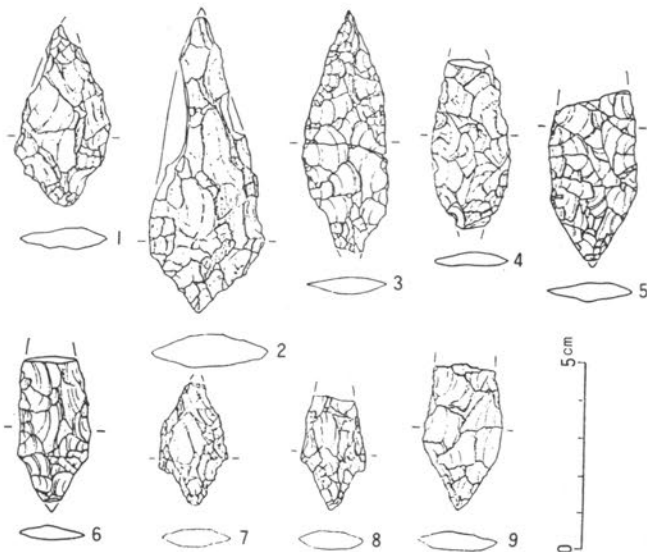
遺跡と比較すると、①平基式群がなく、全て凸基式群で構成される。②小型品は存在するが比率的に乏しい、③側縁が内彎するものがあるといった特徴をもつ。先のNo.12遺跡と成井遺跡との比較から平基式群の量的増大、換言すれば基部の返しの発達は、有舌尖頭器の発達過程と無関係でなく、南原遺跡はNo.12遺跡より古相を示すものといえる。しかしながら、両遺跡の隆起線文土器との間に極端な時間差は認めがたく、南原遺跡出土の有舌尖頭器が該期の組成の全てを示すものではないという可能性も残る。

(花見山遺跡)

同遺跡は既述のとおりNo.12遺跡に近い位置にあると考えられる隆起線文土器の他、いわゆる微隆起線文土器の出土がある。有舌尖頭器がいずれに伴うのか不明であるが、10点の出土をみている。数量的に少ない割に変化に富み、凸基式群を主体に、平基式群があり(3点)、側縁の形態も内彎するもの(4点)がある。大きさも3.5cm程度の小型品の他、7.8cmというやゝ大型のものがあり、内彎する側縁、小型品が多いという特徴がみられるが、一時期の一括資料というわけにはいかず、直接対比することは難しい。埼玉県八ヶ上遺跡と対比すると、微隆起線文土器に伴う有舌尖頭器が過半のようである。

(その他の遺跡)

南関東地方においてNo.12遺跡に近い位置に当たる遺跡として、この他、神奈川県黒川東、東京都多摩ニュータウンNo.426遺跡などがある。いずれの遺跡も有舌尖頭器の出土をみているが、数量的に乏しく総合的な比較検討はできない。しかしながら、黒川東遺跡出土の有舌尖頭器はいくつかの問題を孕んでいる。舌部と基部は余り明瞭に区別できず、太く末端が角型の舌部、



第10図 前田耕地遺跡の有舌尖頭器

やや内彎気味に平行する側縁となる身部をもつ。1点のみでははなはだ心もとないが、岐阜県九合洞穴(澄田他1967)にもみられる特徴的な形態であり、南原遺跡の一部とも関連性をもち、No.12遺跡にも身部形態が類似するものもある(ただし、舌部は尖鋭で角型ではない)。栗島氏は立川ポイントとの関連性を指摘しているが、後に述べるように、より古い段階の遺跡である東京

都前田耕地遺跡にその祖形を求めることは可能であり、立川ポイントの直接的な伝播であるとは言い難い。いずれにせよ、隆起線文土器と伴出する有舌尖頭器の中では古式のものであり、舌部の変形（尖鋭化）はあるものの、平行側縁型（将棋の駒型）の祖形をなすものであろう。多摩ニュータウンNo.426遺跡は、未完成品も含まれるようで、全体の形状の知れるものは、舌部と基部の分離が不明瞭な凸基式のもの及び尖基式のもの各1点である。この他、やゝ粗雑な作りであるが、柳又型に類似する基部破片があり、若干気になるところでもある。東京都前原遺跡（小田他1976）からは明瞭な柳又型の有舌尖頭器が出土している。尖基式、平基式、凹基式が各1点であるが、この他、凸基式で基端部が丸味を帯びたものが1点検出されている。小瀬ヶ沢型と柳又型の共伴関係を示す重要な資料である。刻目のある隆起線文土器が出土している。

さて、これまでNo.12遺跡の周辺地域について同遺跡と時間的に近似する関係の遺跡との対比を試みてきたが、No.12遺跡の有舌尖頭器を理解する上で、より古い段階、そしてより新しい段階の有舌尖頭器の特徴を知る必要がある。まず、古い段階のものであるが、南関東地方において、No.12遺跡、南原遺跡、多摩ニュータウンNo.426遺跡あるいは黒川東遺跡より古式とされる隆起線文土器は検出されていない。最近、隆起線文土器より古いといわれる無文土器の出土が報告されているが、現在のところ実態は明らかでない。

若干、時間的な隔りが感じられるが東京都前田耕地遺跡でまとまった資料があるので比較してみよう。前田耕地遺跡は先土器時代終末の尖頭器を中心とする生産遺跡であり、破片を含めると600点余りに及ぶ夥しい数の尖頭器が出土しており、有舌尖頭器の総数も約100点に達している。前田耕地の有舌尖頭器にはいくつかの際立った特徴がある。①全て尖基式及び凸基式群である。②両者の中でも尖基式群の比率が高く、また凸基式群も申し訳程度の短かい基部が付くのみで太い舌部に続く、つまり舌部の作り出しが明瞭でないといえる。③基端部が丸味をおびるものがある。④側縁が平行的なものが多く、やゝ内彎するものも存在する。⑤出土点数が多いにもかかわらず完形品は驚くほど少ないが、全長6～8cmのものが多いようである（しかし、比率的には少ないものの、全長3～4cmの小型のものも存在する）。このように、前田耕地遺跡の有舌尖頭器は、No.12遺跡はもちろん、より古相を示す南原遺跡を介在させても隔差が大きい。それでも第10図6～8のように舌部が明瞭となる一群があり、側縁が平行的なものも継続的な関係をうかがわせる。しかも大小2種が、前田耕地遺跡から連綿として継続しているのである。なお、前田耕地遺跡の有舌尖頭器にはいま一つ重要な問題がある。尖基式群とされる大半の有舌尖頭器は、棒状の舌部をもつ凸基式群に発達していく姿を同遺跡は示しているが、同遺跡の報告書で第2群b類とされた有舌尖頭器の一部は、他の有舌尖頭器に比し、幅広で扁平であるという特徴がある（橋口他1979）。柳又型有舌尖頭器（第5図）には、基部から小さな微尖基と呼ばれる小さな板状の舌部を突出するものと、基端部から直線的あるいはわずかに内彎する舌

部に移行する尖基式群の二種があるが、板状舌部という共通性があり、一般に扁平である。前田耕地遺跡に特徴的な尖基式群の有舌尖頭器が、一方では棒状舌部をもつ所謂小瀬ヶ沢型と称される一群の祖型となり、一方では尖基式群そのものの発達過程として舌部と基部が分離する形態をとった可能性がある。それは丁度、凸基式群から平基あるいは凹基式群が発達していったのと同じ過程であろう。

次に隆起線文土器の中では最も新しい段階である微隆起線文土器に伴う有舌尖頭器について触れてみたい。微隆起線文土器を出土した遺跡は南関東地方でも類例を増加しつつあるが、有舌尖頭器がまとまって出土した遺跡は以外に少ない。埼玉県橋立岩陰遺跡(芹沢他1967)、神奈川県花見山遺跡、埼玉県八ヶ上遺跡(笠野他1974)などが好例である。なかでも八ヶ上遺跡が代表的であろう。八ヶ上遺跡の有舌尖頭器は凸基式2点、平基式3点である。No12遺跡に対し、①全体的に小型化する。②側縁が内彎し、基端部が張り出すという特徴を有する。

花見山遺跡は既に紹介したが、第7図1は、八ヶ上遺跡と酷似した形態である。橋立岩陰遺跡の3点の有舌尖頭器はいずれも凸基式群であるが、八ヶ上遺跡同様、小型品のみとなっている。前段階まで有舌尖頭器の組成に大きな部分を担っていた側縁平行型(将棋駒型)の一群は著しく衰退していくようである。しかしながら、有舌尖頭器の組成の全てを示す遺跡を欠いているようで、資料不足の感は免れない。

(3) 有舌尖頭器の変遷

No12遺跡出土の有舌尖頭器を中心とし、それとの関係から南関東地方における有舌尖頭器の組成と変遷について述べてきた。資料的な限定から不明瞭なところも少なくないが、前田耕地→南原、空港No12→成井→八ヶ上と変遷を追ってきた。尖基式群の有舌尖頭器→(凸基式群の有舌尖頭器)→凸基式群+平基式群の有舌尖頭器→有舌尖頭器の小形化という大きな流れになるが、基本的には芹沢氏による編年の枠組を外れるものではない。大きくみれば有舌尖頭器の変遷は舌部の発達過程の歴史であり、換言すれば返しをもつ基端部の発達でもある。平基式群や凹基式群の有舌尖頭器の誕生を最盛期とし、やがて隆起線文土器の末期には著しく小型化して、弓矢の盛行とともに衰退していくのである。ただし、前田耕地遺跡の前後にも各一段階の発達過程の存在が予想されよう。全国的な視野で見れば、前田耕地遺跡の有舌尖頭器は新潟県中林遺跡(芹沢1966)に近似するものであり、山形県弓張平遺跡(加藤他1978)も同様である。前田耕地遺跡を遡るものは、新潟県本ノ木、千葉県南大溜袋他例であろう。前田耕地遺跡が尖基式と称することができるように、基部こそ存在が殆んどないものの三角形の舌部形成は明瞭であるのに対し、本ノ木、南大溜袋例は尖頭器の基部端を斜めにそいだような逆梯形の舌部である。前田耕地遺跡と南原、No12遺跡との間にも間隙がある。神奈川亀谷狐穴遺跡

(江藤他1971)をこれに当てる見方(増田1981)もあるが、資料的にいかにも不足であり南関東地方ではまだ未検出としておいた方が良いであろう。各段階の有舌尖頭器の変遷について要約すると以下のとおりとなろう。

第1段階 発生期の有舌尖頭器であり、芹沢氏のいう第1群に当たる。身部は従来の細身の尖頭器そのものであるが、基部両端がそがれたような逆梯形の舌部を形成する。尖頭器と同様大型品である。南大溜袋遺跡で代表される。

第2段階 前田耕地遺跡に代表される。尖基式群の有舌尖頭器を主体とし、凸基式群の有舌尖頭器の萌芽がみられる。小型なものも登場する。芹沢氏のいう第2群に相当するが、中林遺跡は組成が完全ではないようである。舌部の形成が明瞭化しつつある段階で、後の柳又型、小瀬ヶ沢型の祖型をなしている。凸基式群の舌部も左右非対称のものが目立つ。本段階までは土器の検出がない。

第3段階 南原、空港No.12、成井遺跡に代表される。尖基式群は典型的なものは関東地方では乏しくなり、やゝ舌部形成のはっきりしない形態というにすぎなくなる。本段階では凸基式群が主体となり、時期的に下るにつれて平基式群の比重が高くなる。地域的には凹基式群も登場し(小瀬ヶ沢洞穴)、形態、大きさともバラエティーに富んだ組成をもつ。小瀬ヶ沢型と柳又型が明瞭に分離してくるものも本段階である。基端部が発達し、返しとして意識された形態であり、有舌尖頭器の最も発達した段階で芹沢氏の第3群に相当する。隆起線文土器が発生しており、未だ弓矢は主力な狩猟具とはならないもののその萌芽がみられてくる。

第4段階 有舌尖頭器の終焉の姿である。小型なものが著しく多くなり、側縁が内彎するものも多く基端部の突出は前段階よりも顕著である。弓矢の急速に普及とともに衰退化をはじめ。いわゆる微隆起線文土器に伴うことが多いが、爪形文土器の段階で消滅していくと考えられる。芹沢氏の第4群に相当する。

3 小 結

有舌尖頭器は、先土器時代から縄文時代への過渡期にしか存続しなかった寿命の短い石器であるが、狩猟具の改良、変遷を知る上でも、また縄文時代とは何かを知らせてくれる石器でもある。筆者はかつて、縄文時代の狩猟活動を知ろうと有舌尖頭器と石鏃を中心に自然遺物ともからめて検討したことがあるが、当時は有舌尖頭器の編年関係については資料的な制約もあり細部にわたっての考察はなし得なかった。ことに関東地方においては皆目状況は不明な状況であった。しかしながら近年に至って、隆起線文土器を出土する遺跡もかなりの数で検出され、漸くその変遷の実態が明らかになりつつある。神奈川県花見山遺跡、東京都多摩ニュータウン

No426遺跡、さらに千葉県下でも瀬戸遠蓮遺跡、南原遺跡そして空港No12遺跡で隆起線文土器の出土が報せられ、有舌尖頭器もそれに伴って多量の出土をみてきたわけである。従来、有舌尖頭器の変遷は断片的な資料に頼らざるを得ず、地域的に極端な遠隔地の資料との対比にならざるを得なかったのであるが、これらの遺跡から有舌尖頭器の組成内容をかなりの程度まで網羅する資料を得ることができ、より精微な比較検討が可能となりつつある。

本稿は、関東地方、それも南半部にほゞ限定して考察してきたが、浅学のため十分に目的を果たしたわけではない。特に隆起線文土器の編年が不確定な段階で、新旧関係を論じるのは若干無理もある。本小稿は、No12遺跡出土の有舌尖頭器の組成から、有舌尖頭器の編年問題にまで触れてきたが、狩猟具としての問題については検討をなし得なかった。今後、より広範囲な視点から再論してみたいと思っている。

なお、末尾ながら本小論を草するに当たり、石田美代子、橋本勝雄氏には、遺物実測あるいは文献等で多大な援助を賜った。ここに厚く謝意を表する。

引用文献

- 赤堀英三 1929 「石器研究の一方法—石鏃に関する2, 3の試み—」 人類学雑誌 第44巻第3号
麻生 優・白石浩之他 1985 『泉福寺洞穴の発掘記録』
江坂輝弥・西田 栄 1967 「愛媛県上黒岩岩陰遺跡」『日本の洞穴遺跡』
江坂輝弥 1969 「愛媛県上黒岩岩陰遺跡第四次調査速報」 考古学ジャーナル No.37
江坂輝弥・浅川利一・岡島 格 1978 「なすな原遺跡出土の細隆起線文土器」 考古学ジャーナル No.147
大井晴男 1970 「いわゆる有舌尖頭器について」 北海道考古学 第6輯
大塚達朗・小川静夫・田村 隆 1980 「市原市南原遺跡第2次調査抄報」 伊知波良4
大塚達朗 1982 「隆起線文土器管見—関東地方出土当該土器群の型式学的位置—」『東京大学文学部考古学研究室 研究紀要』第1号
小田静夫・伊藤富士夫・C・T・キーリー 1976 『前原遺跡』
笠野毅也 1974 「富士見市ハケ上遺跡の調査」 第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
加藤 稔他 1978 『弓張平遺跡』 第1・2次調査報告書
加藤 稔 1986 「関東・東北地方の有舌尖頭器」 考古学ジャーナル No.258
鈴木義昌・芹沢長介 1967 「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』
栗島義明 1984 「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」 駿台史学 第62号
黒川東遺跡発掘調査団編 1979 『黒川東遺跡』
小林達雄 1963 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」 石器時代 第6号
小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」 信濃 第19巻第4号
小林行雄・佐原 真 1964 『紫雲出』
坂本 彰 1977 「花見山遺跡の隆起線文土器」 港北のむかし71
佐藤達夫 1971 「縄文式土器研究の課題—特に草創期前半の編年について—」 日本歴史第277号

- 篠原 正 1981 「成井遺跡出土の隆起線紋土器」 舌状台地創刊号
- 白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について」 考古学ジャーナル No126・127
- 鈴木重信・坂本 彰 1978 「横浜市花見山遺跡の調査」 第2回神奈川県遺跡調査研究発表要旨
- 鈴木道之助 1972 「縄文時代草創期初頭の狩猟活動—有舌尖頭器の終焉と石鏃の出現をめぐる—」 考古学ジャーナル No76
- 鈴木道之助 1974 「瀬戸遠蓮遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』
- 鈴木道之助 1974 「下総台地における縄文時代初頭の文化」 史館 第4号
- 澄田正一・安達 厚三 1967 「岐阜県九合洞穴」 『日本の洞穴遺跡』
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」 『日本文化研究所研究報告』 第2号
- 芹沢長介・中山淳子 1967 「新潟県津南町本ノ木遺跡発掘調査報告」 越佐研究12
- 芹沢長介・吉田 格・岡田淳子・金子浩昌 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」 石器時代 第8号
- 中村孝三郎 1960 『小瀬ヶ沢洞窟』
- 永峯光一 1967 「長野県石小屋洞穴」 『日本の洞穴遺跡』
- 埴 静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」 『栃木県史資料編考古1』
- 橋口美子 1979 「先土器時代石器群と出土状態」 『前田耕地』 II
- 増田一裕 1981 「有舌尖頭器の再検討」 旧石器考古学第22号
- 増田精一他 1978 『栗木IV』
- 村田文夫他 1980 『黒川東遺跡』
- 森嶋 稔 1986 「本州中央部の有舌尖頭器」 考古学ジャーナル No258
- 樋口昇一・森島 稔・小林 達雄 1967 「木曾開田高原における縄文以前の文化」 信濃 第17巻第6号

(千葉県文化財センター調査部)